

ベトナムのペット事情の光と影

石川 幸

皆様はご自宅でペットを飼われていますか？

私は、現在ペットを飼っていませんが、以前犬を飼っていたことがあります。私のように、日本で犬や猫等のペットを飼うのは一般的だと思いますが、ここベトナムではどうでしょうか。

<ベトナムのペットの歴史>

ベトナムでは一昔前（弊社ベトナム人スタッフ曰く20年ぐらい前）まで、犬や猫は、現在の鶏や豚のように食用としてのみ一般家庭で飼われていました。

実際に、20代の弊社ベトナム人スタッフ数名にヒアリングしたところ、半数以上が子供の頃に犬肉や猫肉を食べた記憶があるとの回答でした。また、約10年前に当社が創業した当時は、ベトナムの都市部でペットを連れているベトナム人はいませんでした（連れているのは決まって西洋人のみ）。また、ベトナムの市内にペットショップは見かけませんでした（日本の40年位前と似ていると言えるでしょうか？）。外資系も含め大手スーパーでも、ペットフードのコーナーは少なかったのも記憶しています。

現在のベトナムでは、犬や猫をペットとして飼う文化が急速に浸透しています。また、若い世代を中心に犬や猫を食べることに抵抗を持つ人が多くなってきました。ハノイなど北部出身の一部の年配の男性を中心に、未だに犬肉は食されているのも事実ですが、大多数のベトナム人の間では、一般的に犬や猫がペットであるという認識が強まり、日本と同じように飼われています。

<ペットはステータス>

そして、一部の富裕層の中には、お金持ちのステータスとして「血統書付きの高価な犬や猫」（ベトナム固有種ではない外国種）を飼う習慣も生まれ始めました。一例を挙げると、ベトナムで人気のあるシベリアンハスキーは約5万円から、ペルシャ猫は約2.5万円から、という値段になっています。このように高価な犬、猫がよく飼われている地域は、ホーチミン市中心部から車で20分ぐらいの場所にあるホーチミン市7区や2区の高級住宅街（外国人も割と多い地区）です。

これらの地域は、庭付きの戸建て住宅が並ぶ高級住宅街で、ペットを飼いやすい環境にもあり、公園を訪れると犬を散歩させている光景をよく見かけます。そのような事情から、他の地区とは異なり、ペットショップ、地場系や日系の動物病院、ペットホテル、関連商品を扱う専門店などが増えています。

<犬カフェ・猫カフェも人気>

一方、他の地域では、部屋が狭い、ペット飼育禁止等の理由からペットが飼えない事情によって、日本と同様に、犬カフェや猫カフェが注目を浴びています。現在、ホーチミン市に犬カフェ9軒、猫カフェ7軒（筆者調べ）があり、動物との交流を求めて人々が訪れています。変わり種では、爬虫類カフェ、鳥カフェも1軒ずつあります。他にも、2014年、Mê Thú Cưng（日本語訳：ペットへの情熱）という名前のペット専門雑誌がベトナムで初めて発行され、ペットブームの到来と言っても過言ではありません。



（犬カフェでの様子）

<ペット問題：盗難と狂犬病>

ペット問題の1つは、食用としての調理目的や、ペット用としての転売目的での盗難が多発していることです。そのため、飼い主の多くは、大切なペットが捕獲されないよう家の外に出さないことも多いと聞いています。

その他には、狂犬病が挙げられます。ホーチミン市で今年の5月頃、犬に噛まれた女性（52歳）が狂犬病を発症し死亡する事件が発生しました。ホーチミン市で狂犬病による死亡が確認されるのは7年ぶりのこととなります（日本で心配するほど、多くは起きておりません！）。ベトナム農業農村開発省獣医局によると、2015年に犬に噛まれてワクチン接種を受けた人の数は全国で39万4,000人に上り、1日平均当たり1,079人がワクチン接種している計算になります。狂犬病は人間だけでなく、愛犬または愛猫も噛まれることで狂犬病が伝染するため、飼い主にとっては気掛かりな問題となっています。

<ペットの未来予想図>

このように問題点もありますが改善される傾向に向かっています。公共の場所や居住区などで犬を放し飼いにした場合、所有者に罰金が科せられるようになりました。さらに、犬猫に狂犬病のワクチン接種を定期的に行うことを徹底するような風潮も広がってきています。

ベトナム経済は、2015年から毎年6%以上の経済成長を記録しており（出典：IMF）、日々の生活に余裕が生まれ、今後ペット市場も拡大すると予測されています。現在、飲食や教育など他の産業と比べペットビジネスは外資規制が厳しくないため、ビジネスを始めるいい機会になるかもしれません。